



人間の運命 第二部

第一卷・孤独の道

芹沢光治良

# 人間の運命

第二部 第一巻 孤独の道



昭和40年6月25日 発行

昭和41年2月5日 2刷

定価 400円

著者 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71

振替 東京808

電話東京(260)1111(代)

---

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田加藤製本所  
乱丁本はお取替いたします。

© by K. Serizawa, Printed in Japan

人間の運命

—第二部—  
第一卷 孤独の道



## 第一章

一九二九年（昭和四年）の十月の中旬、どんより曇った朝、森次郎はフランス船アンドレ・ルボン号で神戸に帰った。

次郎が結婚して間もなく節子とフランスへ向って、NYKの白山丸で神戸を発ったのは、一九二五年（大正十四年）の五月の晴れた日であったから、四年数カ月ぶりに、帰朝したのだが、その間に、彼は二つになる一児をもうけたが、また健康を失っていた――

（その四年半、外国で次郎がどんな風に暮したか、異質の文化にはじめて接して、どんな影響をうけ、どんなに成長したか、この「人間の運命」は日本を書くことを意図するから、その外国生活には意識して触れないことにする。もちろん、帰朝後の生活に、自然にじみ出て、読者がそれを感じできることを期しているが。しかし、「人間の運命」という大伽藍のような建築が完成したあと、なお作者に寿命が残るような幸運が恵まれたならば、「人間の運命」の別冊として、次郎の留学生時代や石田の外国生活を、ヘミングウェイの「移動祝祭日」のよう

に書きあげるばかりでなく、次郎の幼年時代をも書きあげて、大伽藍の門か扉のようなものにしたい所存である——」

「さあ、あなたのお国へ着きましたよ」

その朝早く、そう呼ばれて、次郎は飛びおきた。急いで上陸手続をすませて、甲板に出たが、神戸の街は見えなかった。朝霧がたちこめて、船もゆるやかに航行しているらしく、まだ遙か港の外のようなだ。次郎はしばらく佇んで、朝霧のはれるのを待ったが、やむなく船室へ引きかえして、長椅子に両脚を投げ出しながら、節子に言った。

「波止場に着けば、この左舷の窓から、港の建物が見える筈だから、それまで落着いていればいいんだよ」

節子は松子に外套を着せたり、旅行鞆に入れ残った物を、大きな買物袋に突きこんだり、忙しそうだ。それを眺めながら、次郎は、これで無事に子供と節子を日本へ届けおおせたと、心のなかが空になった思いがした。この一年以上、スイスの高原で死と闘いながら、ただ一つ願っていたことが、これで、かなえられたのだ——

次郎がソルボンヌ大学に提出する卒業論文をタイプで打ちおわって、過労と風邪のために肺炎で倒れ、瀕死の重病人になって、入院して、ようやく回復したが、そのあとで肺結核におかされていることが判明した時、節子は狼狽して、すぐに子供をつれて日本へ帰ると、主張したものだ。

結核が死病であると考えられていたから、外国で次郎に死なれてはと、途方にくれて、早く両親のそばへ帰りたいと、節子はあせった。次郎の病状では、印度洋をわたって四十日間の航海はたえられないと、医者から注意をうけたが、どうせ不治の病だから、航海の途中で不幸にあうことがあっても、日本へ帰る方が安心だと、節子は秘かに考えた。しかし次郎は、結核で死ぬものか、必ず健康になってみせると、必死であったから、医者の言葉にしたがい、故国へ帰らないと、節子の願望をはねつけた。

その頃、子供はパリ郊外の託児所にあずけてあったが、節子は託児所の近所に居を移して、子供がなれたら、子供をつれて独り日本へ帰ると、きおいたって、次郎が病院を出る前に、パリの下宿を引きあげた。節子が子供をつれて、先きに日本へ帰ることを、次郎は却って喜び、パリの病院から直接に、独りスイスの高原療養所へ行った。看護してもらおうというような、甘えた根性では、死の前に闘病はできないと、闘病のきびしさを、知っていたからだ。

しかし、健康な節子は、生きようとする病人の執念を理解できなくて、次郎を利己主義だと憎悪した。妻や子のためならば、死ぬ覚悟で、いっしょに帰るのが夫の愛だと言って、次郎を責めた。それができないのは、自分から妻子をすてたのだから、もう知らない、或る午後、駄々っ子のような勢いで、病室の枕卓のひき出しから、銀行の預金帳や信用状や次郎のパスポートまで持ち出して行った。翌日、次郎の身の廻りのものを二個のトランクに入れて、病院に運びこんで、書物などは木箱にいれて、下宿の地下室にあずけたと告げた。田部氏から次郎に与えられた留学費のなから、今までの病院の費用を差し引いたから、残額で自由に暮すよ



うにと、信用状とパスポートを残して、郊外へ移ったからと、捨て鉢のように言いおいて、永久の別れだと冷たく病室を出て行った。

その時の節子が、今も次郎には、まざまざと思いうかぶのだが……

——この勢いならば、子供をつれて日本へ帰ってくれるだろうと、あの時はひそかに安心したが、やはり心配で、大塚に依頼状を書いたものだった。大塚は節子に会って、すぐ病室に来てくれて、託児所の子供の様子や節子の新しい下宿のことを、詳しく話してから、

「節子さんは、箱入り娘に育ったから、偉えらそうなことを言っても、独りで子供をつれて日本へ帰るなんてことは、とてもできないよ。君に甘えるように我儘を言っただけだと、思うな。しばらく今の下宿にいたら、ぼくの家に来てもらうから、君は安心して、早くスイスへ発ち給え……」と、節子の心を見ぬいたように言ったものだ。

そればかりでなく、病院とも話をつけて、レーザンのサナトリウムに国際電話で交渉して、あれから三日目に、クララと自家用車を乗りつけて、ガアルド・リヨン駅から国際列車に乗せてくれた……

あれから幾月後であつたらうか、節子が雪にうもれたレーザンへ突然来たのは……たしかクリスマスの前日だった、大塚にすすめられて、やむなく夜行で来たと言つて、むくれた顔をしていた。運よく二日つづいた吹雪が前日の夕方からやんで、あざやかに澄みきった空から、新雪に太陽が輝いて、胸のなかまで洗われるような朝だった。きめられていた散歩に出なければならぬので、いっしょに出ようと誘つたところ、怒つて、日本に帰るのでお別れに来たのだ、

最後のお別れだと思えばこそ、はるばる訪ねて来たのに、呑気に散歩に出掛けようとするのは、ひどすぎる、自分を無視する仕打ちだと、目を剥き出して怒った。散歩も処方箋の一つだからと説いたものだった。こんな朝はアルプスが美しいから、最も眺望のいいところまで行こう、君に見せたいと、いつも願っていた眺望だからとも、慰撫した。しかし、節子はがえんじなくて、散歩に出ている間に、パリへ帰るからと、顔面神経までふるわせていた。同病者がいづもどおり誘いに来たから、そのまま散歩に出たが、その間に節子がパリへ帰ってしまったならば、それもよしと、肚をすえたものだった……一時間半の散歩を一時間でぎりあげて、急ぎもどると、節子は病室の療養室からぼんやり外を眺めていたが、枕卓の上においた読みさしのフランス語の小説や机の上の文学書を三冊、破りすてて、床の上にちらばっていた。見るなり、憤怒がこみあげたが、必死に目をつぶって我慢した……

そうだ、その午後、ローザンヌに住んでいる、フランスの世界的なピアニストのアルフレッド・コルトーが、患者にクリスマス・プレゼントを贈るからとて、サナトリウムの講堂で、幾曲もショパンを演奏してくれた。高原の療養所でコルトーを聴けるとは、節子にもこの上ないクリスマス・プレゼントだったろう、機嫌をなおして、ともに講堂へおりて行ったが、あの日のコルトーのショパンはすばらしかった。特に一曲ずつ解説をしてから、演奏したが、あんなふうにコルトー自身、解説をつけて演奏するのは、前代未聞だと、あとで小説家のKが話していたが……

コルトーのショパンがおわったあとで、節子は涙を拭っていた。どうして涙したか、問わな

かったが、ショパンの音楽で機嫌をなおしたらしく、すぐにパリに帰ると言っていたのに拘わらず、四日も雪のなかの療養所にとどまって、朝と夕のきまった散歩にも、雪靴をはき、ステッキをつけて、ともに出かけるほど、親和した態度を示した。あの四日間、幸いに吹雪もなく、冬のスイスの清澄な日がつづいて、節子も白く澄みきったアルプスを思う存分、眺めたが、ぼくの病友とも親しんだ。最後の日の朝の散歩だったが、小説家のKがいっしょで、アルプスの眺望台と呼んでいた「釜の峠」にゆっくり登りながら、節子に話しかけた——

「奥さん、ムッシュ・モリと日本を主題にして、小説を書こうと話しかけていたんですよ。ムッシュにお会いできたことで、私は家内の看護にここへ来てよかったと思うくらいです。共著の小説について、ムッシュといろいろうちあわせるために、ここに長く滞在するので、私の妻はたいへん喜んでおりますよ——」

「マダムはお悪いのですか、ご病氣——」

「散歩の許可が出たら、どんなにしあわせでしょうね、そしたら、いっしょにこの美しい眺望をたのしみ、ムッシュ・モリとの会話も聞いてもらえるのですが……まだ食堂へ出るのさえゆるされていません、嗚呼<sup>オライム</sup>」

「あの、私の主人と共著で……と申すのは、どういう意味ですか」

「ムッシュと二人で一冊小説を書くのです。わかりますか、その小説をフランスで出版するのです」

「私の主人は小説家ではありません」

「知っていますよ。社会学の研究家ですってね。でも、誰でも、生まれながらに小説家ではありませんよ。私も、人は俳優だと言うでしょう。国立演劇学校を出て、オデオン座でアンドルマックのオレスでデビューしましたからね。今でも、いい役さえあれば、舞台にも立ちますから。しかし、それだからと言って、小説を書いて悪いことはないでしょう？ 現に、二冊小説を出版して、文学界から異常な歓迎をうけました。将来を囑望された新進作家だと、言う者もありますよ。ですから、私と共著で小説を発表しても、安心して下さい、ムッシュの恥になるようなことは、絶対ありませんから」

「あの、私の申上げたいのは……私の主人には、文学の才能がないということでございます」  
「マダム。すると、ムッシュの文学的才能は、私の方が識っているということになりますね。私はこの高原で、ムッシュのフランス文をたくさん読みましたよ。それで、ムッシュに文学的な才能を認めて、物を書くようにすすめました。ムッシュはフランス語で書くことに自信がないと仰言るから、私と共著ということを申したんですよ。ムッシュが母国語で書いたら、すばらしいでしょうが、フランスにおるなら、フランス語を書かなければなりませんね。私がロシア人でありながら、フランス語で書くように——」

「ねえ、ほんとう？」と、節子は、ぼくに突然日本語で問いかけた。

外国人と話している時に、日本人同士日本語で話すほど、失礼はないから、ぼくは答えなかつたが、その時、足もとを、雪にまみれた白い犬が、凄まじい勢いでころがり降りるように通つた。節子は小さく驚きの声を挙げて立ちどまり、熊だと思つたと、しばらく動悸がおさまら

ない様子であったが、Kがやはり初めて雪路で犬に会った日のおどろきを話し出して、話題がはなれたので、安心したものだ——

Kが吹雪のやんだ午後、奥さんのために花を探しに、町の花屋へ行ったが、散歩の患者は一人も見えなくて、新雪にうもれた近路も、まだ踏みかためられていなかった。途中で小熊のような黒い犬が、雪の原を、雪をけちらしながら足もとに駈けよって、やはり熊かと驚いたが、しばらくじゃれながら雪路を歩いていると、はあはあ大きく呼吸していた仔犬のあとに、白雪に点々と真赤なルビーが無数にちらばっているのを発見したと思った。そう話して、あの時Kは言った——

「ルビーだと思ったけれど、よく見ると、血のしぶぎでした。驚きましたね……犬も肺結核になつて、雪のなかに咯血して、ルビーをちらしていたのですが、その時、ここがレーザンという世界的結核療養地だと、胸の底からわかりましたよ。実は、ここへ妻を送つて来て、しばらく様子を見た上でパリへ帰るつもりでしたが、その時から、ずっと妻のそばにいてやろう、無事にパリにつれかえられるまでと、肚がすわりましたよ」

あのKの話が節子を不安にしたのであろう、サナトリウム付属のホテルにもどるなり、すぐパリに帰りたいと、言い出した。犬まで結核になるというのだから、ここにおつて、結核が伝染したらば、どうして子供が日本へ帰れるだろうか、それが心配で、もういつときもじつとして居られないと、さわぎ出したから。ホテルに無理に頼んだところ、午後三時のモントルー通過のパリ行き国際列車の切符があつた。ぼくも医者のおゆるしを得て、モントルーへ送つたが、

支度をしながら、節子はKが話していた共著で小説を発表するということが、真実かと、きいた――

「ほんとうだよ」

「フランスへ来て、あんなに、三年以上も勉強したことを、すてるんですか」

「すてるんじゃないさ、病氣している間は、社会科学の勉強はむりだから、ただ中絶したまでだが、療養しながらできることを、したいと思うんだよ」

「できることって……小説でなくても、あるじゃありませんか」

「熟慮したが、ないんだよ……療養がどれほどの期間つづくか、解らんから、真剣に考えたけれど……偶然にここでKさんと出会ったことは、何か運命的な気さえするんだよ。フランス文をなおしてもらったりして、すっかり友達になって、二人で共著で小説を出そうというのは、Kさんの友情というか、全くの厚意だよ。Kさんは若いが、すばらしい作家だからね。Kさんと共著で出せば、次にはほくの独りの小説を出版することも可能になると、Kさんは考えてくれているし……今までの勉強だって、小説に生かせるんだよ」

「あなたって、そんな夢のようなことを本気で考えているんですか。小説を出版するなんて……ルイ・ジュウベさんと親しくしていらしたことを、ずっとあたしは不満でしたし、心配していました。ルイ・ジュウベさんに夢中になって、そら演劇だ、そら音楽だ、そら文学だと、余分のことに精力をつかっていたから、無理になって、病氣になったんじゃないやありませんか。それなのに、療養所に来ると、またKさんに夢中になって、小説を書くなんて言い出して……本

といったら、小説しか読んでいないじゃありませんか」

「創作を考えたのは、Kさんの影響ではないよ。一度、真面目に話したかったが、この病氣になつたのだから、これが僕のほんとうの生き方かも知れないと思つて、努力しているんだよ。話したことがあつたらう？ 今フランスの文壇で活躍しているジュール・ロマンの作品は、僕の勉強しているデュルケーム学派の社会学の影響だから——」

「小説家になるなんて、父が知つたらどんなに悲しむか。小説を書くくらいなら、なんにもしないでいらつた方が、父は喜びます」

「ねえ、結婚した時に、君もお父さんから独立した筈だろう？ お父さんも隣人と思わなければいけないと、話したろう？ お父さんがどう思うなんてことは、どうでもいいんだよ。ぼくも真剣に生きようとしていて、ここでできる勉強を必死にしているんで……君もかりに反対であつても、しばらく静観して欲しいんだ。お父さんなんか隣人だが、君は隣人ではすまされなからね」

「あたしには父が大切ですよ、父にすてられたら、子供と二人、路頭に迷いますもの」

……あれ以上話しても、理解を深めることなく、たがいに気まずくなるだけだつたらう。ただパリに帰つて、話しあつたことを静かに思い出して、独り考えなおしてくればいいと、願つたのだが……あの日、モントルーはよく晴れて、駅のホームからレマン湖がよく見えたが、湖面は春のように光っていて、白鳥がうかんでいた。独りパリにもどる節子があわれで、なんとか慰めたいと、言葉を探したが、みつからなかつた。めつたなことを言つて、節子の心をつ

らだててることを怖れて、列車のはいるのを、ならんで待っていたが、節子はぼつんとまるで独言のように言った。

「わたしはお別れのつもりで来たのよ。あなたはやはり、日本へお帰りになる気がないようですわね。あたしは子供をつれて帰った方がいいと思うの……心細いし、父や母も、孫をつれて行けば、他に土産はなくても喜んでくれるでしょうから……」

答えようがなかったが、すぐ列車がはいって、一分後には、国際列車は、節子をさらって行った。託児所へ週に三回出向いて、子供ともなれたし、子供の食物や育児の方法も覚えた、話していたから、マルセイユ港までクララにでも送ってもらって、日本船に乗りこめば、あとは安全に日本へ着けるから、節子も本気に日本へ帰る決心をしたものと、あの時は覚悟した……が、わるい自分だと、節子への憐憫の情にたえられなくて、地に伏して慟哭したかった。節子に詫びたかった。あの夜おそくレーザンに帰ったが、心の重みに、三四日発熱して、散歩も禁止させられたほどだった——

あれから節子が日本に帰らなかつたのは、大塚にいさめられたからであらうか。独りで日本へ帰ると言ったのは、やはり独り娘らしい我儘で、自制できなかったからであらうか——復活祭の休暇のあとだった、前ぶれもなく、大塚夫妻が節子とレーザンに訪ねてくれた。フロレンスの郊外のフイエゾレに別荘を持つ友人にたのまれて、クララがその別荘の室内装飾をかえるので、下見に行く途中で立ちよつたと言ったが、あれはぼくの心を安めるための口実で、節子が世話になっていて、困らせていたからではなからうか。着いて一時間もしないで、大塚は療



養所の庭へぼくを誘い出して、言ったから……

「ねえ、森、君の健康が航海をゆるすようになり次第、一度、奥さんを送って日本へ行つて来た方がよくないか……君がKさんと小説を共著として出したり、少し健康になれば、ルイ・ジュベも幕間の仕事を手伝つてもらえると言っているから、パリで経済的に生活もできるし、将来パリでいい仕事ができると思うよ。だけれど、奥さんはフランスで暮すのは、不安で、たえられないらしいんだな。無理ないと思うが、奥さんは純粹な日本の女性で、フランスの風土になじめないし、フランス人のなかにはいれないんだな。臆病で、ご自分をひらいて行けないから、苦しむことばかりで、砂漠のなかにいるように淋しいんじゃないのか……日本で幸福な家庭で、多くの人にかしずかれて、苦勞なく育つたから、パリでの孤独にたえられないんだよ、パリのよさが、奥さんには欠点になるんだね……僕は奥さんといっしょに住んで、それが初めてわかつたんだが、同情したよ。奥さんをご両親のところへ送つて行つてあげた方がいいと思うな……帰りたいと、あれほど希っているんだし、お一人では、四十日の航海ができないと、ためらつていられるようだからね——」

「ありがとう」

「それでね、いつになったら、安心して航海できる健康になるか、主治医の意見で決定した方がいいと思うよ、いつ頃の船に乗るか、きめたら、奥さんも安心すると思うんだ——」

大塚は大決心をして話したことに相違ない。決して、でしゃばりやお節介をする男でなくて、長い友情から、見ていられなくなったに相違ない。あの時、ぼく達は療養所の庭から牧場